

テレビメディアとオリンピック―「非日常性」の強化に着目して― A Study of Television Media and the Olympic Games ―Focusing on the Emphasis of Unusualness ―

1K07B044-7 落合 佐和子

指導教員 主査 石井昌幸 先生 副査 寒川恒夫 先生

【はじめに】

2008年のオリンピック北京大会、私たちは選手の活躍に一喜一憂した。私たちがこんなにもスポーツする人を応援したくなる背景にはメディアの存在がある。本研究では、テレビメディアによるスポーツに関する番組の在り方の変化について、オリンピック大会期間中の番組の量的・質的变化を中心として考察した。

【第1章】

議論の前提として、メディアという言葉の定義、スポーツとマスメディアの関係の歴史などについて論じた。オリンピックに代表される国際的スポーツは、過去および現在において、高い平均視聴率を期待できる魅力的なメディアコンテンツであると言える。このため、国際的な大イベントの放映権料は年々増加し、莫大な額にのぼっている。オリンピックの場合、このような状況への分岐点となったのは、ロサンゼルス大会であった。オリンピックの運営は放映権料からの収益によって、以前とは比較にならないほどの資金を得ることができるようになった反面、大会自体が放映権料収入に依存し、メディア側の意向をつねに反映せざるをえないという問題も生まれている。

【第2章】

それでは、ロサンゼルス大会以降のオリンピックのメディアイベント化は、日本におけるオリンピックに関する番組にどのような影響を与えたのであろうか。第2章では、ロサンゼルス五輪の次の大会である88年ソウル大会を起点として、2000年シドニー大会、08年北京大会のそれぞれにおける、大会期間中のスポーツに関する番組の放送時間の変化を定量的に分析した。

その結果、北京大会以降、オリンピック報道は量、割合ともに大きく増加することが判った。この傾向は民放各局の番組に特に顕著である。また、番組そのものが長時間化していることも明らかとなった。ソウル大会においては、民放各局の番組に4時間以上のものが全く見られない、北京大会においては全番組の4割以上が4時間を超える番組となっている。シドニー大会は、総放送時間という点では、ソウル大会と同じであるが、1番組あたりの長時間化という意味では北京に向けての変化を表している。

オリンピック以外のスポーツに目を向けると、北京大会に

なつて、期間中、地上波においてプロ野球中継が全くなくなつている点が目された。これにはBS放送、CS放送の登場が大きく関係していると考えられる。

【第3章】

第2章でみたオリンピックに関する番組の長時間化は、なぜ起こつたのであろうか。本章ではこのことを、スポーツの「日常性」と「非日常性」という観点から分析する。オリンピックに関する番組の近年の変化は、①「日常の延長期」、②「日常からの離脱期」、③「日常への再接近期」の3つの段階にわけることができる。

①「日常の延長期」には、東洋の魔女として活躍した全日本女子バレーボールチームなどに見られるように、スポーツ選手は、私たちの日常生活の延長に位置する存在であった。②「日常からの離脱期」になると、スポーツ選手のエリート化や高所得化により、選手が身近な存在ではなくなつていった。それが③「日常への再接近期」になつて、第2章で見たとおり、スポーツ選手のスポーツしている部分以外を演出しようとするテレビの手法が増加した。これが番組の長時間化の原因である。

では、なぜ選手の日常性が強調されるのであろうか。それは、スポーツの世界的なメディアイベント化のなかで、世界的なイベント自体が日常化、陳腐化してしまつたためであると考えられる。また、②「日常からの離脱期」で指摘したとおり、メディア化にともなつて、選手は雲の上の存在になつてしまつた。そこで、選手の日常性を強調することによって、相対的にスポーツのもつ「非日常性」際立たせるという手法が作りだされたのではないだろうか。

【終わりに】

本研究では、データに基づく緻密な分析を心がけたが、対象としたオリンピックの前後や間のオリンピックについては全く手つかずである。今後、それらについて調査、分析することで、より正確な考察ができると考えられる。また、この調査については、今後も継続して行い、変化するメディアに対応していくことが望ましいと考える。